

---

# 恋姫＋無双 師弟伝

郁斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫十無双 師弟伝

### 【Nコード】

N1037T

### 【作者名】

郁斗

### 【あらすじ】

師と弟子。

反逆する者とそれを止める者。

彼は迷い無く乱世へと降り立った。

無論止める者となるために。

オリジナル主人公及びキャラクターが登場します

真・恋姫十無双の二次小説です

## 第一話「消えた者」

一人の男が消えようとしていた。

或る時は「人殺し」と罵られ、或る時は「師」と敬われた者。

そしてその男を止める者が一人。

決してお互いの顔を伺おうとはせず、背中に語りかけた。

「どうしても行くのですか？」

その者の問いに足を止め、ゆっくりと答える。

「彼は私の弟子。そして私は師なのです。唯それだけの理由です。」  
投げ捨てるように発し、男は今一度足を進めた。

「それが例え、」

「貴方が貴方でいられなくなったとしても？」

彼は無言で頷いた。

数刻前。

辺りは暗く水晶の明りが一つ。

その対面に男の影が二つ。

互いの空気は張り詰めていた。

「やはり貴方にはお仕えできません。」

男の口から発せられた言葉。

それは唐突に、しかし運命付けられていた言葉。  
残された残響と共に彼は闇へ沈んだ。

弟子を止めることができなかった自分。

それでもやはり私は行かなくてはならない。

彼が何をしようとしているのか。

どれだけ大きな惨劇を引き起こそうとしているのか。

「：そうですか。ならばもう何も言う事はありません。」

「必ず、止めてください。」

またしても闇に消えた男が一人。

言葉は天に向けて発せられた。

「私は甘いのでしょうか。」

「或いは」

「愚かなのでしょうか。」

物語は今始まった。

## 第一話「消えた者」(後書き)

郁斗と申します。

試行錯誤しながらの初投稿となります。

使い方もイマイチ分かっておりませんので、色々不都合等あるとは思いますが。

宜しくお願いします。

## 第二話「乱世への始まり」

「ここですか…。」

降り立った地には文字通り何も無く、見渡す限りの荒野。

風が吹きすさべば塵が立つ。

遠くには雄大な山々、生い茂る木々。

しかし耳を澄ましてみると、奇妙な音が鳴っている。

まるで大地を揺るがすような轟音が響く。

「うん…?」

この地に降り立った男は、恐る恐る音が鳴る方へと目を凝らした。

すると見えてくるのは、女にしては露出が高く、男にしては余りにも奇抜な風貌の化け物だった。

そしてこちらを標的としているのか、一直線に向かってくる。

自分の目を疑いながら何度も瞬きをする度に刻々と近付いてくる。

化け物だと確信した時には既に目の前に現れていた。

「うわあああつ!」

思わず横へと避け、間一髪で化け物の突進を免れた。

「んもう、どうして避けるのよ」

体勢を直し、顔を上げると絶句した。

褐色の肌に桃色の下着を身につけ、耳の前に生え下がった髪の毛はご丁寧にも三つ編みされている。しかも髪と呼ばれているのはその部分だけ。他は何も生えていない。

「いや、誰だつていきなり突進なんてされたら避けますよ…」

大袈裟に溜息をつき、呆れた口調で言う。

「それにしても久しぶりねえ」

「まさか貂蝉とお会いできるとは思いませんでしたよ」

貂蝉と呼ばれた者は苦笑しながら視線を向けた。

その彼はというと、辺りをしきりに警戒しながら目を見張っている。

「大丈夫よ、ここは漢王朝の時代。貴方を狙っている者は誰もいないわ」

そうでしたか、と一言添えて本題へと切り出した。

「それで、何故ここに？」

「勿論、貴方の手助けによ。お弟子さんが厄介なことをしようとしているみたいだからね」  
貂蝉は続ける。

「これから戦乱の世へとなるのは間違いないわ」  
「漢王朝には支配力も無く、各諸侯は名を馳せるために戦を起こしている」

彼は目を閉じ、無言で貂蝉の話聞いていた。

「王朝の退廃も時間の問題。悪政が続く民衆は豪族にも虐げられている、そんな時代ね」

「それに貴方のお弟子さんが便乗しようとしているわ」

貂蝉の目つきが変わり、鋭い視線を向けた。

姿勢を正し、空気が張り詰めたままゆっくりと口を開く。

「それで彼は」

「私の弟子は、どこにいますか」

「…実はまだ分からないのよ」

「機を伺いながら、どこかに潜んでいるんだと思う」

そうでしたか、とまた一言添えて、

「手遅れになる前に、ですね」

風が吹き荒れると共に、貂蝉の横を静かに通り過ぎる。

「そつえば」

貂蝉に不意に呼び止められ、足を止めた。  
振り返ると怪訝そうな表情でこちらを見ていた。

「貴方、名前はどつするの？」

先程よりも強い風が吹き荒れ、目元を擦りながら貂蝉へ視線を向けた。

「…これからは、楊衛やうゑいと名乗ります」

## 第二話「乱世への始まり」(後書き)

序章はこれで終了です。

これから本編へと続きます。

### 第三話「救った命」

楊衛は悩んでいた。

そのまま立ち去ろうとしていた楊衛へ、今気付いたかのように貂蟬は様々な話を伝えた。

「真名」という神聖な名前があり無闇に呼んではいけないということ、

路銀はこれを使えと渡されたのは軍を起こすことが出来る程の量であり、

そして「天の御遣い」と呼ばれる者がこの大陸に現れるということ。

天の御遣いと弟子が手を組むとなると、非常に厄介だった。

「天の御使い」はこの大陸を太平へと導く者であり、しかもそれは民衆で噂され待ち望まれている存在だということ。

それを利用し、名を馳せようとする者は必ずいるはず。

貂蟬からの話では、この大陸に楊衛の弟子がいることは分かっている。

だが手掛かりは無く、彼が「いつ」「どこで」「何を」「しようとしているか」までは分からない。

本来の目的が未だ掴めないままであった。

「しかし本当に」

楊衛は呟く。

「何もありませんね……」

見渡せば荒野が。遠くを眺めれば山々が。

街や人も当然無く、有るのは貂蝉が残した突進の轍が長く引かれて  
いるだけ。

こうしていても仕方が無い、と楊衛は歩き出した。

半刻程、轍に沿って歩いていると違和感を感じた。

酷く低い音。そして焼けるような臭い。

目視こそ出来はしないが、明らかに異質な違和感だった。

「……まさか」

楊衛は違和感へと走った。

徐々に明確としてくる音、臭い。

そのどれもが嫌悪すべき、「あの」もの。

そして目を凝らすとはつきり捉えることが出来た。

一つの村が襲われている。

所々に火は上がり、飛び交う金属の音、悲鳴。

一方的な略奪に、成す術なく倒れていく村人。

楊衛は何も発する事なく村へと入り、剣を振りかざす賊を睨んだ。奥には一人の少女が身を震わせながら泣いていた。

視線に気付いた賊は5人。

その誰もが楊衛に剣先を向ける。

「何だ貴様は」

下品に吐き出された言葉に、楊衛は睨みながらゆっくりと進む。武器も持たず剣先へと向かう男に賊は嘲笑する。

そして、賊の一人の罵声と共に一斉に楊衛へと駆け出した。

「消えなさい」

彼が発した時には、賊が言葉通り消えていた。

賊が持っていた武器のみが、地面に散乱していた。

楊衛は乱れた服を整え、少女の元へと向かった。

「怪我は、ありませんか？」

差し伸べた手を見向きもせず、首を縦に振りながら何度も頷く少女。

虚ろな目のまま震える体を自分で抱きしめていた。

楊衛は半ば強引に、火の手が上がらない場所へと少女の手を引いた。

「必ず戻ります」

繋いだ手を両手で覆いながら膝を下げ、楊衛は言った。

少女は無言で頷きながら楊衛の目を見る。

それに応えるようにもう一度強く握り、賊へと向かう。

数刻後、襲っていた賊は皆姿を消した。

火も消え、村人は互いに涙している。

命あることに喜ぶ者。家族を亡くし喚く者。

喧騒は未だ静かに続いていた。

楊衛はあの少女の元へ向かった。

少女は楊衛を見るや否や駆け出し、抱きついて泣き叫んだ。  
声を上げ、楊衛の中で泣き喚いた。

もう大丈夫、と楊衛は何度も応える。

「この度はありがとうございました」

楊衛は少女と別れてから村長の元へと通されていた。外では復興をしている中、村長は深々と頭を下げる。

「顔を上げてください」

「私には、助けられなかった命もあるのですから」

「それでも、貴方様に助けていただいた命もあるのです」

顔を上げた村長は、燃えた家を皆で直している光景を遠く眺めた。或る者は痛めた足を引き摺りながら、或る者は涙を拭きながら。それでも誰一人手を休めようとはせず、懸命に村の復興へと果たしていく。

その光景を楊衛もじっと見ていた。

「旅人だとお見受けしますが、お名前は？」

村長が口を開いて尋ねた。

「これは失礼しました」

「姓は楊、名は衛。字は子遷しせんと申します」

今度は楊衛が深々と頭を下げた。

「楊衛様はこれからどうなさるのです?」

そうですね、と楊衛は顎に手を掛ける。

「復興の手伝いをしたいと考えています」

「これは私の身勝手な願いです」

頭を下げる楊衛に一度は断った村長だったが、彼の真摯な態度の末に折れてしまった。

「実はこの後どうするかなどは考えておりませんでした」

「世間知らずな旅人故に、様々な情報を聞いて回ろうかと」

なるほど、と村長は相槌を打つ。

「何から何までありがとうございます。宿も用意させますので、今日はお休みを」

楊衛はその言葉に甘え、村長の家を離れた。

そして村人の元へと向かい、家々の復興を手伝った。

その間、行く人行く人に感謝され、その奥で先程の少女を見つけた。

楊衛が近付くと、少女も気付いたのか楊衛の元へと走った。

背丈は楊衛の胸ほどで、帽子を深く被り目を泳がせながら楊衛の顔を窺う。

「あ、あの…ありがとうございました……」

少女は何度も頭を下げ、か細い声で感謝を伝えた。  
楊衛も膝を落とし、少女の視線に下げて懸命に頭を下げる少女の肩  
に手を置いた。

「そういえば、自己紹介がまだでしたね」

「私は楊衛。字は子遷です」

「あっ、あの…私は」

「姓は徐、名は福、字は元直で、真名は霏です」

### 第三話「救った命」(後書き)

本編開始です。

楊衛さんの身なりだとか云々は追々まとめて書こうと思っています。  
オリキャラも登場していますが、それも追々まとめて「r」  
「何ぞ」と思われるかもしれませんが、申し訳ありません。

## 第四話「出発」

「楊衛様」

村の復興が全て終わり、怪我人の治療をしていた楊衛に村長が話しかける。  
少々お待ちを、と包帯を丁寧に巻き終わると姿勢を正して楊衛は振り向いた。

「少し外に出ましょう」

村長はすっかり元通りとなった村の大通りを歩きながら、楊衛と並んだ。

行商人の姿も見え、元気に駆け回る子供の姿もある。  
その光景を二人で眺めながら頬を緩ませた。

「楊衛様のお力があったからこそ、今の儂らがあるのです」  
「本当にありがとうございます」

村長が頭を下げると、恐縮しながら楊衛も頭を下げ返した。

「とじろで」

「これからどうなさるのですか？」

楊衛は遠くを眺めながら顎に手を掛けた。

本来この地に降り立った目的は弟子を探すため。

まだ曖昧としている中、時間が迫っているとはいえ闇雲に探しても無駄だとは承知している。

余りにも広大なこの大陸で「人を探す」というのは難しいとも楊衛は把握していた。

「また貴方をお願いするのは非常に気が引けるのですが」

楊衛が考えを述べないまま、村長は次の言葉を聞いた。

その真剣な表情に楊衛は視線を向けた。

「雫を、徐福を、荊州の司馬徽の元へ連れてってくださいませんか」  
村長はそのまま続ける。

「雫と雫の家族は襲撃された日に司馬徽の学問所へと発つはずでした」  
「ですが、賊に両親を殺され身寄りが居ないのです」

楊衛は目を逸らさず、村長の言葉を待った。

「彼女の才は目を見張るものがあるのです」

「このままこの村で生を終えるのでは、雫の家族にも顔向けできま

せん。どうかお願いできませんか？」

再び村長は深く頭を下げ、楊衛を窺う。

いつの間にか辺りの喧騒も落ち着き、大通りには村長と楊衛のみとなっていた。

楊衛は、顔を上げてくださいと言発した後こう言った。

「承知しました。徐福と共に司馬徽の元へと参ります」

顔を上げるのと同時に村長は楊衛の手を取り、何度も感謝を伝えた。さすがの楊衛もこれには苦笑しながら頷いていた。

その光景を遠くから眺めている少女が一人。

雫だった。

出発が明日に迫った前夜。

村から半里程離れた丘で、楊衛は村長からもらった徳利を飲んでいた。

片手に杯を持ちながら、空を見上げる。

夏の夜。満天の星もまた楊衛を見下ろしていた。

「徐福？」

楊衛は後ろの気配を察し、振り向くことなく名前を呼んだ。そのまま楊衛の隣に腰を下ろしたのは、雫。

「…本当に良いのですか？」

今は帽子を被っておらず、銀色の髪が風で揺れている。膝を抱え込むようにして、楊衛の顔を覗きこんだ。

「そつえば」

「私の真名を言っていないませんでしたね」

楊衛は杯の酒を一気に飲み干すと、視線を雫に向けた。

「永脩えいしゅうです。少しの間ですが宜しくお願いしますね、雫」

「永脩…様」

呟くように雫は楊衛の名を呼んだ。  
楊衛はお酒を注ぎ、空を見上げる。

「明日は早いですよ、もう休みなさい」

楊衛の横顔に何度も視線を向けた雫は、はいと頷くと立ち上がりその場を去った。

途中振り返っていたことを楊衛は気づいていたが、杯に口を付け酒を飲んでいた。

雫の気配が無くなったのを確認し、もう一度空を見上げて呟く。

「これも」

「…貴方が望んだことなのでしょうが」

出発の朝。

村の正門には多くの人が集まっていた。

勿論、村を救った楊衛と雫を見送るため。

人々がしきりに楊衛に感謝を伝える中、村を代表する村長が前に出た。

「道中お気をつけて」

「雫も楊衛様にご迷惑かけることのないようにな」

楊衛と雫は人々に一礼すると、村を出発し司馬徽の元へと旅立った。

二里程を歩いていると、不意に雫が口を開いた。

「永脩様は、道士なのですか？」

雫が楊衛の顔を覗き込みながら、真剣な表情で尋ねる。

「何故そう思ったのです？」

ええと、と口籠りながら雫は一度俯いた。

「助けてくださった時、永脩様の手に護符のようなものを手にしていたのが見えました」

「そして昨日の夜にも徳利の傍に同じものを見つけてしまったので」

雫はそう言つとまた俯く。

楊衛は雫の言葉を聞くと、いきなり小さな笑みを零した。

「なっ何か、変なことを言っしまいましたか…?」

雫は照れながら深く帽子を被り直した。

「いえ、まさかそこまで見ているとは思っていませんでしたよ」  
「さすがです、雫」

褒められた雫はより一層顔を赤らめ肩に下げていた鞆を抱きしめた。  
楊衛は俯く雫に微笑みながら頭を撫でた。

「ですが、私は道士ではありませんよ」  
「少し知識が有るだけの唯の旅人です」

雫は顔を上げ、楊衛に頭を撫でられながら微笑み返した。

司馬徽の学問所がある小さな村へと到着したのは夜だった。  
夜に訪ねるのは迷惑だろうと二人の考えで、まずは宿を探していた。

辺りの家は明りも消え、人通りは無い。

二人で手分けしながら宿を探していると、楊衛は大きな家の前で一人座り込んでいる少年を見つけた。

ゆっくりと近付き膝を下げると、少年も顔を上げる。

「どうかしましたか？」

少年は赤い目を擦りながら、後ろにある家主と喧嘩したのだと楊衛に伝えた。

「では一緒に謝りに行きましょうか」

首を大きく縦に振った少年の手を引いて、楊衛は正門へと歩いた。こちらから家主を呼びかけようとすると、一人の女性が出てきた。周囲を窺うと、どうやらここが司馬徽の学問所らしく、門には「水鏡塾」と書かれていた。

少年がその女性を見るや否や、駆け出して泣きながら謝った。

女性は少年の頭を撫でて微笑む。

何度も謝る少年を中に入れ、女性は楊衛へゆっくりと頭を下げた。

「司馬徳操と申します」

楊衛も自分の名を伝え、宿を探している旨を伝えた。

「それでしたら、こちらに泊まってはとうですか？」

正門で楊衛と司馬徽が話しているのを見つけた雫は、駆け寄って楊

衛の後ろに隠れた。

視線を司馬徽に向けては隠れ、楊衛の着物の袖を握っていた。

司馬徽はそれを見てどうぞ、と微笑みながら中へ通した。

辺りはすっかり暗く門下生は寝静まっていた頃だったが、二人は客間へ通された。

二人の対面に司馬徽は姿勢を正して座る。

「改めまして、楊子遷と申します」

「えっと…徐元直と申します」

頭を下げながら二人の紹介を終えると、楊衛は司馬徽に雫の入門について話した。

快く了承した司馬徽が微笑むと、雫は安堵した溜息を付き横の楊衛へと寄り掛かった。

視線を雫に向けると、静かな寝息を立てて目を瞑っている。

「お疲れみたいですな」

そのようです、と小さく楊衛と司馬徽は笑った。

第四話「出発」(後書き)

頑張れ、自分。

## 第五話「邂逅」

夜は既に更け、虫の音が静かに騒ぐ。

晴れて司馬徽の門下となつた雫が眠つた後、楊衛は一人外の正門へと足を運んでいた。

その様子を見かけた司馬徽は声を掛ける。

「お休みにならないのですか？」

楊衛は軽く頷く。

「出会つて間もない男と閨を共にするのは、ね」

苦笑しながら司馬徽に視線を向ける。

これは失礼しました、と着物の袖で顔を隠しながら司馬徽は言った。

「では、お話でもどうぞでしょう」

司馬徽は楊衛の横へと並び、顔を窺つた。

再度軽く頷く楊衛。

寝ている門下を起こさぬようと、二人正門へと足を運んだ。

「出会つて間もない、と仰いましたか……」

楊衛は顎に手を掛け、栗の村の襲撃そして身寄りがいなくなったことを話した。

司馬徽は真剣な表情で耳を傾ける。

そして、楊衛が話終わると一層思い詰めた表情で楊衛に尋ねた。

「貴方は旅人なのですか？」

何故、と楊衛が聞き返す間も無く司馬徽は続ける。

「人に教える身として様々な人間を見てきました」

「商人や書生、将軍。ですが、貴方のような旅人は見たことがないのです」

楊衛の目に映っていたのは、疑心ではなく単なる好奇心。

その本質を見通す司馬徽の目に一度圧倒されたが、直ぐに楊衛は言葉を返した。

「この乱世の時代に、私のような面妖な旅人がいても良いのではありませんか？」

その言葉の後、二人は小さく笑う。

そうかもしれませんが、と司馬徽は目を細めながら頷く。

頬が緩んだまま司馬徽はこう続けた。

「勿論、貴方のような旅人がおられても不思議ではありませんね」  
「有らぬお気持ちにさせてしまったのならば謝ります」

楊衛も緩む表情のまま首を横に振った。

「貴女が感づいている通りかもしれませんが」

遠くを眺めた楊衛は、また自分の顎に手を掛けた。

「ですが貴女のような女性ならば、雫は大丈夫でしょう」

ふふ、と軽く笑みを零した司馬徽も楊衛と同じ先を見つめた。

そして、しばらく経った後に司馬徽は口を開いた。

「楊衛様はこれからどちらに？」

一瞬大きく目を見開いた楊衛は、情報を聞き込むのを忘れていたことに気付く。

以前の村では、復興や怪我人の治療に時間を取られ全く得られていなかった。

さてどうしようかと考えていると、不意に司馬徽は楊衛の肩を叩く。

「お困りのようですね」

どうやら理由も悟られていると、先程の表情とは打って変わった深い笑みで理解できた。

楊衛が苦笑しながら何も言わずに頭を下げると、司馬徽は笑みを零す。

「実は男手が欲しいと思っていたところなのですよ」

いよいよ乾いた笑いしか出なくなった楊衛。

「旅人なのですから、その広い見識も門下生に教えてくださいますか」

司馬徽は終始笑みを壊さず、楊衛が頷くと同時に腕を引いて学問所へと進んだ。

楊衛が学問所に着いてから幾日経ったある日、司馬徽の元に訪問者が現れた。  
頭まで羽織る黒い外套、口元のみが晒される姿は奇妙な視線を浴びていた。

門下と共に書を書いていた楊衛はその気配を察し、すぐ戻ります、と一言筆を置いて部屋を急ぎ出る。

「ようやく、なのかもしれませぬね」

滅多に見せる事のない楊衛を見て、門下生や他の教師も首を傾げた。そのまま司馬徽の部屋に腰を下ろし呼吸を整え、外から声を掛ける。

「楊子遷でございませぬ」

中からどうぞ、と司馬徽の声を確認し、ゆっくりと戸を開ける。  
楊衛は頭を上げ、部屋の二人に視線を向けた。

「どうなされましたか？」

普段と変わらない口調のまま、司馬徽が窺う。

楊衛は表情を変えず、尋ねた司馬徽ではなく黒い外套の者へと視線を流す。

相手もまた、視線は楊衛を捉えている。

「楊衛様？」

何も発さない楊衛を見て、怪訝そうに楊衛を覗き込む。

「いえ……」

「お話が終わりましたら、この者と二人で話がしたいのですが」

はあ、と気が抜けた返事で司馬徽は返した。

楊衛は一礼すると、早々にその場を去った。

楊衛の部屋へと案内された訪問者は、両手を床に付きゆっくりと頭を下げた。

「顔を上げてください」

張り詰めた空気の中、楊衛は姿勢を崩さずに続けた。

「何故ここに来たのです」

頭まで羽織っていた外套が動き、顔が覗かれる。

口元は紅く、鋭い目、白い肌、美人と称される女性の顔立ちだった。

「これを」

外套の中から楊衛へと手渡されたのは、一振の太刀。

黒漆を塗り、鞘と柄に護符が何重にも巻かれている。

傷一つ無いその拵えには、「牙」の文字が刻まれていた。

その刀を見た楊衛の表情が曇る。

「貴方様がもしもの時にと私に預けたものでございます」

「今がその時だと身勝手ながら判断致しました」

楊衛が差し出した刀を受け取り鞘から刀身を抜くと、その白い片刃に楊衛の顔が映る。

ゆっくりと目を閉じながら、刀を傍らに置いた。

「貴女に尋ねたいことがあります」

楊衛は鋭い視線を向けた。

「天の御遣いの到来はいつなのですか」

「正確には分かり得ませんが…」

「恐らくは甲子きのえねの年と見ております」

腕を組み俯く楊衛に尋ねる。

「やはり、天の御遣いと？」

「私が弟子ならば必ずそうします」

「これほど影響有る存在はいない。どのような目的だとしても不可  
欠でしょう」

外套を羽織る女性は、今一度姿勢を正し深く頭を下げる。

「是非とも貴方様のお力になりたく存じます」

おやめなさい、と楊衛は言い放つ。

「貴女さえ良ければ、私に力を貸してください」

楊衛と訪問者は村の入口へと進む。

その間、お互い何も発すること無く足を運んだ。  
楊衛の腰には先程の刀が下げされており、照りつける光を黒く反射し楊衛の顔が一瞬強張った。

「それは、やはり貴方様のものです」

不意に口を開いた訪問者へ視線を向けると、彼女は一步前に進んだ。

「では私はこれで」

丁寧に一礼し、村を後にする彼女に楊衛は呼び止める。

「管輅」

管輅と呼ばれた女性は、楊衛へと振り返る。

「私情ならば、切り捨てるべきですよ」

そう言って微笑んだ楊衛は司馬徽の学問所へと身体を向ける。

その離れる背中をじっと見つめていた管輅は両手を合わせ、空へと

顔を上げた。

「どっか」

「どっか、」無事で

## 第五話「邂逅」（後書き）

書くの忘れてました。

史実を大きくズレます。特に出生年の時期。

すみませんでした。

## 第六話「覚悟」

「お一人では危険過ぎます」  
司馬徽が楊衛に言う。

続け様に私塾の教師も言った。

「そうです、明日には官軍が来られるとの報せも有るのですよ」

司馬徽の門下生に書を教える事になってから幾日が経っていた。  
雲一つ無い快晴の下、楊衛は村の正門にいた。

管輅に手渡された黒漆の太刀を腰に下げ、村の外へと鋭い視線を向ける。

行商人が血相を変えて私塾へと駆け込んだ事から始まる。

楊衛が自室で朝食を摂っていると、司馬徽が慌てた表情で呼び出した。

その表情から只事では無いと察した楊衛は直ぐ立ち上がり、共に行商人の元へと向かう。

息を切らしていた行商人は二人に事情を説明する。

近くの村が賊に襲撃され、金目の物は勿論、村人は成す術無く殺さ

れた。

更に若い女性は連れ去られたという。

県令に救援を要請してはいるが、必ずしも定かではない。

そして、雫のいた村を救った楊衛がこの私塾にいる事を聞いた行商人は、助けを求めに来たという。

行商人が顛末を全て二人に伝え終えると、気が抜けたように崩れ落ちた。

顔色も悪く、縋るように駆け寄った楊衛の手を握る。

「御願ひ致します」

呟くように発し、気を失う行商人。

司馬徽が他の教師を呼び、中で休ませるようにと指示を伝える。

気を失うも楊衛の右手はしっかりと握られていた。

そして片方の左手で太刀の柄を強く握る。

「ご心配には及びませんよ」

「必ず戻って参ります」

そう言い放った楊衛は背を向け、襲撃された村へと向かおうとする。

すると、奥から走ってきた雫が楊衛へと呼び掛けた。

「永脩様」

息を整えながら雫は続ける。

「私も連れて行って下さい」

楊衛は足を止めたが、振り返ること無くゆっくりと首を横へと振った。

そして腰の太刀を持ち直し、真つ直ぐ前へと視線を向ける。

「貴女の覚悟を未だ見ていないから、です」

遠ざかる楊衛の背中を雫はずっと見つめていた。

村に着いた楊衛は直ぐに怪我人の手当に向かった。

手当をする人もおらず、残っていたのは小さい子供と老人が殆どであった。

辺りの家は燃えた跡が残り、瓦礫の山が積み上げられていた。  
そしてむせ返るような死臭。

到着した際、只の旅人が何故ここに？と皆怪訝な表情をしていたが、  
行商人が助けを求めたのはあの「楊衛」であることを知り生き残つ  
た村人が助けを請う。

まずは怪我人を、と楊衛は動ける村人と共に手当てをしていく。

そして、一通り手当てを終えた楊衛の着物を誰かが引つ張つた。  
振り返ると三角に尖つた暗い藍色の帽子を深く被る少女がいた。

背丈は雫よりも低く、楊衛を何度も見ては俯く。

視線を泳がせる姿に楊衛は膝を下げる。

「あ、あの…」

口籠る少女の姿に楊衛は次の言葉を待つ。

「ここから、二里ほど北へ向かって、行きました…」

険しい表情に変えた楊衛が、それは賊が？と尋ねると少女は一度身  
体を固めたが縦に頷いた。

そして直ぐ様に立ち上がり、帽子に手を置くと頬を緩める楊衛。  
「ありがとうございます」

顔を赤く染める少女。  
姿勢を正し、彼女に礼を言った楊衛は村を後にする。

少女から聞いた通り、北へと向かうと賊が拠点としていた場所があった。

賊の集落は数百人の規模で、最早村の手に負えない程の組織と化している。

その光景を見た楊衛は目を細める。

遠くには物見の櫓が数箇所有り、賊にしては勢力が高い集団だと分かった。

だが所詮は賊は賊。

斥候が楊衛を発見すると、直ぐに武装し10人程で囲んだ。

「何者だ」

槍の先を楊衛へと向ける。

目を瞑ったまま微動だにしない楊衛を睨んだ。

「連れ去った村人を解放しなさい」

表情を変えない楊衛へと嘲笑が浴びせられる。

そして一人の号令と共に槍が動いた。

標的は無論、楊衛の身体目掛けて。

目を見開き楊衛が衿の中に片手を入れると、2枚の護符を掴む。人差し指と中指、薬指と小指でそれぞれ掴んでいる。それを足元へ投げ放ち、鋭い目つきで発した。

「己を、無力さを知りなさい」

放たれた護符は光り、楊衛を囲んでいる賊へ差した。身体は赤い閃光で纏われ、悲鳴も挙げる事なく一瞬で消えた。武器を落とす音だけが無情に響く。

一部始終を見ていた物見が、集落全体へ知らせるように鐘を鳴らす。本来ならば官軍が攻め込み緊急を要する鐘。それが鳴っていると気付いた他の賊は、武装し楊衛へと向かった。

斥候の報せを受けた賊は、たった一人で乗り込んで来た楊衛を見て圧倒される。

武器という武器は腰に下げている太刀のみ。それを目の前に、この数百人の自分たちにどう刃向かうつもりなのか。

「このような話を知っていますか」

気後れする賊へ楊衛は言葉を続ける。

「此所以知可攻而攻、不可攻而止（攻むべきを知りて攻め、攻むべからずして止むゆえんなり）。」

「今は貴方の時ではありません」

手にしていた護符が宙が舞うと、先の閃光が降り注ぐ。その光に差された賊は、跡形も無く消えてゆく。逃げ惑うも逃れられず、一人、また一人と姿を消す。

楊衛はその中へゆっくりと前に進む。

そしてこの日、一つの集落が消えた。

奥には連れ去られた村人が拘束されていた。目に生気が見えず衰弱し切っていた皆を、楊衛は解放し共に村へと向かった。

到着し直ぐに治療へと向かう楊衛に感謝を告げる。

「本当にありがとうございます」

「官軍へは私から申し上げておきます」

と、長らしき老人が深々と頭を下げた。

「あ、あの……」

又もや楊衛の着物を誰かが引つ張る。  
振り返るとそこには先程の少女がいた。

「土元、今このお方はお忙しいのだぞ。後にしなさい」

長老が少女を叱る。  
それを見ていた楊衛が声を掛ける。

「いえ、この子が賊の住処を教えてくれたのです」

あの時はありがとうございました、と楊衛は腰を下ろし少女に頭を下げる。

「えっ、いや…あの……」

目を背けてしまった少女は俯きながら、帽子を深く被り直した。  
立ち上がる楊衛は長老へと頭を下げる。

「申し遅れました、私は楊衛。字は子遷と申します」

「今は荊州の司馬徽の元で学を教えておりますが、旅の者です」

司馬徽という言葉に俯いていた少女が顔を上げる。そして何かを訴えるように楊衛の袖を引っ張った。

「何かありましたか？」

楊衛が少女の顔を覗き込むと、また俯いては視線を泳がせた。その光景を見ていた長老が口を開く。

「彼女は、鳳土元。司馬徽の私塾に入門したいと常日頃言っていたのですよ」

「恐らく楊衛様が仰ったのでこのように」

俯きながらも袖を掴む手を離さない少女の手を取り、楊衛はこう言った。

「では、一緒に行きましょうか」

長老と少女は頭を下げた。

「あつ、あの、私は、ほと、」

「楊衛様！」

紹介を終える前に、怪我人を見ていた村人が楊衛を呼ぶ。どうやら手に負えない程の出血らしく、血相を抱えて飛び出してきた。

ではまた後で、楊衛は一礼するとその場を去った。

「貴方様は、天の御使いでは無いのですか…？」

楊衛も村人も去った広場で鳳土元は呟いた。

楊衛が村を発つ日には、多くの村人が駆け寄り見送りに来た。一人ではなく、隣にはあの後紹介を交わした鳳統という少女を連れて。

村人全員が楊衛に頭を下げる。

「本当にありがとうございました」

楊衛も頭を下げ、鳳統と共に司馬徽の元へと向かった。

到着するや否や司馬徽から小言を突付かれたが、鳳統が楊衛の後ろから顔を覗かせれば一気に表情が変わった。

事情を説明すると快く入門を引き受け、司馬徽が強引に鳳統の手を

取った。

「これからよろしくね、鳳統ちゃん」

それを見ていた楊衛が苦笑を浮かべる。

自室に戻り残っていた書物を片付けると、辺りはもう既に暗く夜となっていた。

そして外の風にも当たろうと部屋を出ると、慌てている様子の教師を見掛けた。

向こうが楊衛を見つけ駆け寄る。

「徐福を見ていませんか？」

事情を聞くと、今朝から私塾にも姿を見せず部屋にも戻っていないという。

険しい表情に変わった楊衛は直ぐに外へと飛び出した。

「ここに居ましたか」

雫は学問所の近くにある小川の傍で膝を抱えながら座っていた。

楊衛は雫の隣に腰を下ろし、自分の結髪を解いた。

楊衛の黒い髪が風に揺れた。

「皆が探していましたよ」

空を見上げながら雫が眩く。

「私は」

「私は、救いたいです」

目に涙を浮かべながら雫は言葉を続ける。

「私と同じような境遇には、なつて欲しくくないです」

そのまま、雫は顔を俯け泣き崩れた。

視線を雫に向けていた楊衛も空を見上げた。

「少々貴女には厳しいことを言います」

目を瞑りながら言葉を溜める。

「命を救うというのは義だけで救えるものではありません」

横顔だけを覗かせながら、楊衛を見つめる雫。

「時に、争いを【善】だと捉えなくてはならない時もあるのです」

「無論、私利私欲など以ての外です」

開いた楊衛のその目はしっかりと雫を映す。

「民を守りたいなら知を学びなさい」

「仲間を守りたいなら戦を知りなさい」

「この乱世を救いたいなら、貴女の【強さ】を身に付けなさい」

「そう考えるのが難しいならば」

雫の手を楊衛の両手が覆う。

「そのような想い、早々と断ち切りなさい」

黙って耳を傾けていた雫は涙を零した。

そして、楊衛の胸へと抱きつく。

何度も背中を撫でる楊衛は空を見上げる。

泣き止んだ雫を見て、早く戻りなさい、と楊衛は私塾へと雫を逸らせた。

腰を下ろしたまま一人呟く。

「言い過ぎたかもしれませんね」

顎に手を掛けたまま続けた。

「ですが…」

「貴女には出来るなら、ここへ来て欲しくはないのです」

一つの星が空を覆う。  
やはり近いのだ、と楊衛は確信し私塾へと向かった。

## 第七話「徐福の手記」

行商人から「天の御使い」の話聞いた事があります。

【白き衣を纏い、知勇と術を用いてこの大陸を太平の世にする】

その話を聞いた時、私は決心しました。

いつの日か、この御方に仕えたい。

民が虐げられているこの乱世を救いたい。

その為に私と父と母は水鏡先生の私塾へと向かう予定でした。

知に少々の自信があつた私は心待ちにしていました。

軍略、戦術を学問所で身に付け、天の御使いのお傍で知略を発揮するため。

一夜明けた後、恐ろしい轟音が村に響きました。

賊が私たちの村を襲ってきたのです。

逃げようとするも、村の仲間は無術に殺されてゆきました。

飛び交う悲鳴に私は立ち竦み、辛うじて父と母の呼び掛けに応じることが出来たのを今でも憶えています。

あの時、私は死を覚悟していました。

父と母は私を庇い目の前で殺され、もう立つ事も出来なくなった私は目を閉じてその時を待っていました。

賊が武器を振り下ろそうとしたその時、突然白い着物を身に纏った男性が現れました。

その御方は武器という武器も持たず、賊へと向かいます。

右手に数枚の護符を持ったまま、終始睨み付けていました。

標的をその御方に変えた賊は、嘲笑しながら一斉に彼へと襲い掛かりました。

「消えなさい」

たったその一言で、私を囲んでいた賊は文字通り消えました。

何が起こったのか分からず、恐怖と併せ動くことすら出来ない私にゆっくりと彼は歩み寄って来ました。

「怪我は、ありませんか？」

手を差し伸べられても身体が上手く動いてもらえず、只々首を縦に振ることが出来た程です。

それを察したのか、私の右手を握ると未だ火の手が回っていない家へと引き、もう片方の手も握ってくれました。

「必ず戻ります」

その両手はとても暖かく、私を覗き込んだ瞳は優しく。

その全てが私を安心させるものでした。

そうして私の命を助けてくださった方と数刻程別れた時、終始考え  
ていました。  
傷一つない白い着物に長い黒髪、そして見たこともない術。  
旅人のようにも見えないですし、軍に属している將軍様にも見えま  
せんでした。

もしやこの御方が、と一瞬考えましたが、彼が私の目の前に現れま  
した。

その御方が目に映ると、何も考えることが出来ず、悲しみが一斉に  
傾れ込んで涙が止まりませんでした。

「もう父も母も、村の仲間も帰ってこない」

その現実がいきなり襲いかかり、私はその御方の胸で声を上げ泣き  
ました。

もう大丈夫です、と背中を何度も撫でられながら私は気を失ってし  
まいました。

目が覚めると、村の診療所でした。

大勢の怪我人が出て、動ける者がその治療に当たっている状況でし  
た。

賊がいなくなったという報せを受け、私は一目散にあの御方を探し  
に行きました。

その御方は家々の復興を手伝っている最中でした。

私に気付くと、先程の優しい微笑みを浮かべながら名前を教えてくださいました。

楊子遷様。

私の真名も伝え、私の肩に置かれたその手も先程と同じく暖かなものでした。

次の朝、村長と楊衛様を見かけました。

村長が私を水鏡先生の元へと連れて行って欲しいと楊衛様に話しています。

私が駆け出そうとする前に楊衛様が承諾してくださいました。

そうして私は水鏡先生の私塾へと足を踏み入れることが出来たのです。

その晩、御礼を伝えたくて楊衛様の元へと向かいました。

私の命、村の復興、そして荊州への件、感謝してもきれない程です。

それでも楊衛様は私に何も言うことなく、永脩という真名を教えてくださいました。

私塾への道中、私は思い切って永脩様に尋ねました。

見たことの無い術や護符を使い、賊を消したあの時。

道士ならば、と確信も無く尋ねてみると、永脩様は小さく笑みを零しました。

そして、私の観察力を褒めて唯の旅人です、と優しく返してくださいました。

私塾へ到着すると、難なく入門を許可してくださいました。

水鏡先生も快く私を受け入れてくださり、永脩様とはここでお別れかとも思いましたが、どうやらここで学問を教えてくださいなさるそうです。

学を教えることもできる旅人。

私の確信は徐々に変わっていきました。

やはり、天の御使いとは永脩様のことではないか、と。

ある日、行商人の方から近くの村が襲撃に遭っているとの報せを受けました。

その為に永脩様は一人で向かうとのことでした。

私は少しでも身に付けた知略で永脩様の力になりたい。

その一心で連れて行ってくださるように頼みました。

ですが、こちらを振り返ることもせず、首を横に振るだけでした。

「貴女の覚悟を未だ見ていないから、です」

そう永脩様は仰って襲撃された村へと向かいました。

私は一人、悩んでいました。

覚悟とは何か。

救うという覚悟。

乱世を鎮めるための覚悟。

永脩様は私の覚悟を見ていないからと仰った。

今は剣も握る武も無く、かと言って治める知略も無い。

それでもやはり私は

夜になった頃、永脩様が私を探しに来てくださいました。

永脩様はご自分の髪を解くと、私の言葉を待つように隣へ腰掛けました。

私は何も考え出すことも出来ず、只言葉を続けました。

私と同じ境遇には合って欲しくない。

この乱世を救いたい。

虐げられている民を救いたい。

流れ出る言葉に私は泣き崩れ、永脩様は口を開きます。

「この乱世を救いたいなら、貴女の【強さ】を身に付けなさい」

「そう考えるのが難しいならば」

「そのような想い、早々と断ち切りなさい」

私の手を永脩様の両手が覆い、そのまま数刻程経ちました。  
泣き止んだ私は永脩様を後にし、私塾へと戻りました。

私の強さ。

今の私では何も出来ないことを見据えて仰ったのだと感じます。

永脩様はこの乱世をどう見ておられるのだろうか。

鎮めようとお考えになっているのだろうか。

頑なに旅人だと断言する事の真意は何だろうか。

今の私では何も分かりません。

次の朝、新しく入門した鳳統という私ぐらいの女の子から、色々と話を聞くことができました。

やはり彼女も永脩様が天の御使いでは無いかと考えているようです。

【白き衣を纏い、知勇と術を用いてこの大陸を太平の世にする】

私は永脩様が天の御使いであると信じています。

その為に私は【私の強さ】を身に付け、戦乱を終わらせたい。

民の世を作っていきたい。

もし仮にそうではなかったとしても、私は永脩様に仕えたい。  
永脩様のお傍で知を発揮したい。

今はそう感じています。

## 第八話「新たなる出立」

「此所以知可攻而攻、不可攻而止」

「この意味を、そうですね。徐福に」

楊衛が司馬徽の私塾で学を教えることとなって早一ヶ月。  
この日も国政や軍事などといった、様々な書を教えている。

「はい」

「【攻むべきを知りて攻め、攻むべからずして止むゆえんなり】」

雲が静かに立ち、書を持ちながら言葉を続ける。

「敵軍の状況を注意深く観察し、良い判断を下さねば自軍が負けることは避けられないでしょう」

「動静や、進退。それら全てを偵察した上で慎重に偵察すべきです。」

「陣形はいかなるものか。将兵の士気はどうか。旗印はしっかりと掲げられているか。」

「そのように即ち、攻めるべきときには攻め、攻めてはならないときには攻めない。」

「これが、周の軍師、呂尚によって書かれた【敵を知る】兵法です。」

楊衛は何度も頷きながら、周りの門下生へと視線を向ける。

「その通りです」

「敵軍を知り、冷静に分析しなければ良将とは言い難い」

「自軍の将兵の言動にも耳を傾けなさい。軍の勝機を失うことのないように」

そう言葉を続けた楊衛は、門下の一人一人に強い視線を向けながら伝えてゆく。

その誰もが楊衛の言葉に耳を傾けていた。

そして書を閉じて休憩の時間にするように伝える。

次の時間はどうしようかと、自室で別の書を手を掛けると司馬徽と鳳統が訪ねてきた。

「まさか書にもお詳しいとは」

「最初は見聞でも教えてくださると思っていたのですが」

微笑む口元を袖で隠しながら司馬徽は言う。

鳳統はというと、司馬徽の後ろに隠れながら何度も顔を覗かせていた。

「まさか」

楊衛も頬を緩ませながら返した。

「門下生と共に学んでいるのですよ」

少しの談義を繰り返した後、司馬徽の表情が変わる。真剣な眼差しで楊衛へと姿勢を正した。その表情を汲み取ったのか、鳳統も座る姿勢を正す。

「天の御使いの話をご存知ですか」

ええ、と楊衛は頷く。

「白き衣を纏い、知勇と術を用いてこの大陸を太平の世にする、というものです」

三人の間に張り詰めた空気が流れる。

楊衛はゆっくりと顎に自らの手を掛けた。

「実は鳳土元から色々お聞きしました」

視線を横の鳳統へと一度流すと、真っ直ぐに楊衛を見据える。

「貴方はもしや」

「司馬徽様」

部屋の扉の向こうから、司馬徽を呼ぶ声。

どうぞ、と応えると私塾の教師が何やら慌てた表情を浮かべていた。

「漢王朝からの使者が参りました」

「楊衛様にお会いしたいと」

楊衛は部屋の二人を一度見て、こちらへ通すようにと私塾の教師に頼んだ。

それから程無くして、白い深衣を纏い深紅の帯を締めた使者が楊衛の部屋へ入る。

「楊子遷だな」

姿勢を正した楊衛は、拱手し深々と頭を下げる。

「済まぬが、この者と二人で話がしたい」

使者は楊衛へと顔を向けたまま、司馬徽と鳳統に言い放った。

二人も一度頭を下げ、楊衛の部屋を後にした。

二人が去った部屋には音も無く、どちらが発する言葉も無かった。差し出されたお茶に手を掛けることもなく、楊衛と使者の間に重い空気が流れる。

楊衛は怪訝な表情を浮かべ、ついに口を開いた。

「で」

「いつ【それ】を解くのです」

楊衛は深く溜息を付き、半ば呆れながら使者へと向けた。

「やっぱり分かっちゃいました？」

先程までとは人が変わったように、軽い口調の使者。その途端、使者は白い光に包まれた。

徐々に光が薄くなっていくと、現れたのは楊衛と同じような白い深衣を纏った少女だった。

肩まで伸びた黒髪に、深紅の耳飾り。

そのどれもが楊衛と酷似している風貌だった。

「で」

「何をしに来たのですか、茉莉<sup>まじ</sup>」

変わらない口調で腕を組み、楊衛は続ける。

「ご主人さまー」

茉莉と呼ばれた少女は、楊衛の胸へ目掛けて飛び込んだ。これには楊衛も対応できずに、身体を硬直させた。

「っ！、やめなさい、離れ、なさいっ！」

楊衛はしがみついた茉莉を無理引き剥がした。乱れた服を整えると同じ質問で尋ねる。

えーもーちよっとー、と拗ねながら渋々先程の場所へと戻る。そして姿勢を直すと楊衛に返した。

「勿論アイツを懲らしめにですよ！ご主人様に刃向かったんですから！」

茉莉は胸の前で拳を握る。

一つ溜息を付いて、楊衛は俯く。

「とにかく、彼の所在が分かったら私に」

「任せてください！」

楊衛の言葉が終わる前に意気込まれ、今度は前よりも深く大袈裟に溜息を付く。

対して茉莉は別段変わらず、楊衛の顔をいきなり下から覗き込んだ。

「それでご主人様はどうなさるんですか？」

覗き込んだ茉莉の肩を掴み、元の場所へと戻しながら言葉を続ける。

「まずは、各地で情報を集めます」

「客将としても良いかもしれませんがね」

客将という言葉に反応した茉莉が表情を一転させ鬼気迫るように顔を近づける。

「ご主人様が！？」

何か問題でも？と何度も茉莉の肩を掴んで戻す。

このやり取りに疲れたのか、楊衛は肩を撫で下ろす。

「いえ、別に！」

そう言い放つも、視線は横へ流し、受け入れられない姿勢は誰にでも汲み取れた。

顔を背ける茉莉を説得して、何とかその場を凌いだ。

こうして私塾の教師と使者としての会談は終わり、漢王朝の風貌に戻すよう楊衛は命じた。

「戻し方忘れちゃいました」

その一言で楊衛は三度目の溜息を付く。

正門ではなく他の者に見つからないよう裏口への案内をする。

気配を察される事無く、裏口へと着いた二人。

楊衛は今一度茉莉に視線を向けた。

「いいですか、今使者としてこの地に来ているのですから」

「もう、分かっていますって」

又しても楊衛が終わる前に言われ、肩を落とす。

別れ際、茉莉は思い出したかのように急に振り向いた。

その表情は先程と打って変わって真剣な目つきだった。

「私は何があってもご主人様の味方ですから」

視線を逸らす事無く、楊衛を見据える茉莉。

「」自分の命を投げ出すことはしないでくださいね」

勿論ですよ、と楊衛が微笑んで返す。

それを見た茉莉も頬を緩め、背中を向けた。

村の裏口に一人楊衛が呟く。

腰に掛けた太刀を左手で持ち直し、空を見上げる。

「さて」

「私も動くとしましょう」

「大変お世話になりました」

前日の夜、楊衛は司馬徽の部屋を訪ね明日に出発する旨を伝えた。終始残念そうな表情を浮かべていたが、特に反発されることも無く司馬徽は承諾した。

その次の朝、大勢の門下と村人が正門へと集まっていた。怪我人の治療や、門下への学問など、楊衛に世話になった者が見送りに来た。

楊衛は皆へ頭を下げると、奥から一人雫が現れた。

「永脩様……」

零れる涙を拭きながら楊衛と歩み寄る。

「大丈夫です」

「きつとまたお会いできますよ」

膝を下げ、肩に手を置き微笑む楊衛。

「……必ずお会いできますよね？」

赤い目を擦りながら縋るように楊衛の手を握った。

「この指輪を貴女に」

そう言つて楊衛は右の人差し指に掛けていた指輪を雫へと渡した。それは楊衛の耳飾りと同じ深紅の指輪。

「もし、貴女の覚悟が本物ならばそれを私に返しに来なさい」

「いつでも待っていますから」

置いていた手を肩から離し、もう一度皆に一礼すると楊衛は背を向け歩き出した。

雫は渡された指輪を握り、自分の中指へと掛けた。いつか必ず返しに行く、と強く握り直して。

「まずはどこから行きましょうか」

まずは近い洛陽にでも、とは思っていた楊衛だった。

だが今こうして貂蝉、管輅、そして茉莉の三名が弟子の動向を探っている。

闇雲に一人探していても掴める手がかりは僅かだろうと踏んだ楊衛。

ならば客将として迎え入れてもらえる軍に入り、情報を集められればと考えていた。

但しそうなるとある程度の融通が利く軍を探す必要がある。

しかしまだ漢王朝が上辺だけとは言え統率している状況。

今は動くべき時では無いのかもしれない。

天の御使いの到来が甲子の年と管輅は言っていた。

その時まで待つべきか否か迷う楊衛。

考え込んでいた楊衛が何かに気付く。

耳を澄ますと、轟音が微かに響いていた。

飛び交う金属音。鳴り叫ぶと関の声。

何が起こっているのかは容易に想像できたが、その様子を一望できる丘へと楊衛は足を運ぶ。

「いつの世も、戦乱なのですね」

賊の討伐に向かう軍勢。

一系乱れぬ隊列に鼓舞する將軍。

それを遠くに見つめながら楊衛は呟いた。

「暫し、身を伏しましょうか」

そう言い残した姿を誰も見ることも無く、楊衛は去った。

第八話「新たなる出立」（後書き）

かなり間が空いてしまいました。

途中で投げ出すようなことはしませんが、今大幅に話の内容を変えていますので、少し更新速度が遅くなると思います。

すみません。

## 第九話「計略」

楊衛が司馬徽の私塾から旅立って早半年が経とうとしていた。楊衛は各地を旅して情報を集めていた。

その間賊に襲われる集落を救いつつも、動向を察知出来ずに嘆く日々が続く。

自分の家而建て隠居の身としながら、弟子の目的を探るべく貂蝉、管輅、茉莉そして楊衛が今日も集まっていた。

いつもと同じ光景かと思いきや、楊衛の一言から状況は一変する。

「と彼の考えは読めますね」

楊衛が遂に目的を掴んだのだ。  
手掛かりを聞いた三名は驚愕する。

「アイツなんか出来るんですか!?!」

茉莉が椅子から急に立ち、前に乗り出すと楊衛に迫った。  
対して楊衛は不愉快な表情を浮かべ、溜息を吐きながら言う。

「聞こえていますからもう少し静かにしなさい、茉莉」

渋々と大人しく座る茉莉の続け様に、黒い外套を纏った管輅が尋ねた。

「そのような事が本当に可能なのでしょうか？」

俯いたまま楊衛は鮮明に呟く。

「可能です」

緊迫した空気が流れる。

三人は楊衛の言葉を待った。

「強い意志を持ち、精練された者であれば難しい事ではない」  
「そして彼はそのどちらにも有しています。」

顔を上げた楊衛が皆の顔を窺いながら続ける。

「但し、成し遂げる為には相当の時間を要します」

「遅過ぎたのかしら…」

顎に手を掛けながら普段とは打って変わった真剣な表情で貂蝉が呟いた。

腕を組んだ楊衛は目を瞑り、吐き捨てるように言う。

「或いは」

「早過ぎたのかもしれない」

「可能であるならこちらも同等な力が要するのでは？」

重い空気の中、口を開いたのは管輅。

楊衛へと顔を向けながら姿勢一つ変えずに尋ねる。

「軍を結成する、と？」

楊衛は俯いたまま視線だけを管輅に流して言った。

「難しいんじゃないですかー？こんな話誰も信じませんって」

机に腕を付き、顎に手を掛け気怠そうに茉莉が言い放った。それに賛同した貂蝉も頷く。

「茉莉の言う通りね。これは常軌を逸するものだわ」

「それにその二人の存在もね」

楊衛と茉莉を指し、溜息を吐いた楊衛が大袈裟に肩を落としながらこう言った。

「それは貂蟬にも言えることでしょう…」

「まっ、失礼ね！」

怒る貂蟬を宥めながら、腰に下げた太刀を組み直して楊衛は姿勢を正す。

「ですが目的は分かりました」

表情が変わった楊衛に視線を向ける三人。  
又も張り詰めた空気が流れる。

「此処にいつまでも居る訳にはいかないのは事実」

「一刻を争う時かもしれません、その為の策は投じます」

「必ず、阻止します」

楊衛は強い視線を向け、自分の掌を握った。  
軋むような音を立てながら目を瞑ると、不意に茉莉が口を開いた。

「あ。そーいえば」

「水鏡つて人からこれご主人様につて」

自分の懐から文を取り出して楊衛に渡す。

その書状に目を通していた楊衛の顔が曇る。

「……なるほど」

読み終えた楊衛が丁寧に文を元へと戻し、急に腰を上げる。

「管輅は天の御使いを探してください」

「貂蝉は卑弥呼へこれを」

衿の中から書状を貂蝉に渡す。

中を覗いた貂蝉は表情を怪訝なものに変え楊衛に尋ねた。

「これで…いいのかしら？」

「無論です」

「この策、卑弥呼にも巻き込まれてもらいましょう」

微笑みながら楊衛は視線を向け、二人に頭を下げた。

その二人は直ぐに楊衛の家を出発する。

「えっと…私は？」

取り残された自分を指差して首を傾げる茉莉。  
横で二人を見送った楊衛が視線を向ける。

「茉莉は私と共に来るように」

「参りますよ、并州へ」

并州へと到着した二人は直ぐに城へと足を運ぶ。  
そして楊衛は立ち止まって茉莉へと声を掛ける。

「ここで待っていてくれますね」

後ろで騒ぐ茉莉には目もくれず、司馬徽からの紹介状を渡す楊衛。  
謁見の間へ通された楊衛は拱手し頭を下げる。

「楊子遷と申します」

周りには多数の将兵と軍師。  
足を組みながら玉座に座る女性が口を開いた。

「其方が水鏡の…ふむ。」

見定めるようにまじまじと楊衛を見つめる。  
白銀の髪に、鋭い目。  
傍らには髪と同じ色の剣を携え、楊衛に顔を上げるように命じた。

「我は丁原と申す」

「率直に申すぞ。我に仕える気はないか？」

顔を上げた楊衛が口を開く。

「一つ、尋ねても宜しいでしょうか」

姿勢を正し、頭を上げた楊衛は目を逸らさずに丁原に告げる。

「水鏡から聞かれたのであれば私が旅人であることはお耳に届いて  
いらつしやる筈」

「その真意をお聞かせいたいただきたい」

今一度顔を下げる楊衛。

丁原は何度も頷きながら言葉を続けた。

「其方が天の御使いだと聞いておる」

大きく目を見開いた楊衛。

楊衛の口が開くも、遮るように丁原は続ける。

「水鏡もの人物が曖昧模糊な噂に惑わされる事はない」

「そうまでして其方を推している根拠を我が眼にて確かめておきた  
いのだ」

足を組み直した丁原は強い眼差しを向ける。

その楊衛は姿勢を変えずに尋ねた。

「それは一体どのような？」

二度手を叩き、人を呼ぶ丁原。

「奉先を呼べ」

すると奥から一人の武人が現れた。

その風貌は勇ましい姿というよりも穏やかな空気を身に纏っていた  
が、楊衛はその中の武を見抜き一度小さく身構える。

深紅の布を首に巻き、身の丈を超える程の戟を手に楊衛を捉えた。

「此奴は我が軍で最も武を誇る者だ」

「この者と手合わせするのは如何であろうか」

顎に手を掛け険しい表情を見せる楊衛に対し、口元を緩ませる丁原。軽い笑みを零したまま目を逸らさずに双方の武人を見ていた。

「なに、ただの座興よ」

合流した茉莉は慌てながら楊衛に尋ねる。

「大丈夫なんですか？ご主人様」

歩幅を変えず共に歩く二人。

無表情のまま楊衛は口を開いた。

「何がでしょう？」

「だって、あの人凄く強そうですね。ご主人様が剣を握ってるのは見たことないんですけど…」

「大体使えるんですか？それ」

それと言って指差したのは楊衛の太刀。  
黒漆を塗った刀を楊衛は一度組み直した。

「成る程、これは良い機会かもしれません」

一人納得した表情を浮かべ微笑んだ楊衛を見て、茉莉は首を傾げる。

そうして、訓練場へと足を運び二人の武人は対峙した。

「楊子遷と申します」

拱手し頭を下げる楊衛。

戟を肩に乗せ、表情を変えぬまま呂布は呟く。

「……………恋は呂布」

構えを取る二人。

太刀の柄を右で掴み、右足を前に出す楊衛。

間合いを取らさぬように、緊迫した空気の中楊衛は呟く。

「では、尋常に」

先手を取ったのは楊衛。

右から踏み出した足を軸にして、刀身を抜かず鞘に収めたまま振り抜いた。

その刹那、呂布は楊衛の一撃を避け後方へ退く。

「ふむ…。」

太刀を腰へと戻し、楊衛は一度構えを解く。

そうして自分の袖を捲りながら、目を細める。

「何故、あの御仁は刀を抜かぬのだ？」

「あれは只の飾りか」

呂布が手合わせをすると聞いて集まってきた兵が騒ぐ。

如何にしてあの呂將軍と対峙するのか。

もしやあの太刀に秘密があるのか。

それに耳を傾けることなく、楊衛は今一度同じ構えを取る。

「流石ですね」

「……………お前も、強い」

互いに賞賛する二人。

だが、楊衛の間合いは既に大きく呂布を纏う。決して刀身は抜く事無く一言呟いた。

「参ります」

先程の速さとは比べるまでも無い程の右の切り上げ。反応に防ぐ戟が宙に舞い、振り抜いた先の鞘が黒く光る。

「……………負けた」

兵が気付いた時には、既に勝敗は帰っていた。

呂布の戟が地に刺さり、楊衛の鞘が喉を当てている。

「呂將軍が……」

「奉先様の武を凌ぐ者がいるとは」

「しかも剣を抜かずに一撃で、だぞ」

覚めやらぬ喧騒の中、終始奥で座していた丁原が口を開いた。

「見事であった」

「楊衛と申したな、今一度言つ。仕える気はないか？」

「そうですね…」

腕を組み楊衛は呂布に視線を向ける。

「奉先殿」

「…？」

腰を上げた呂布が首を傾げた。

先程の表情とは変わり、笑みを浮かべ歩み寄る楊衛。

「奪つ為の武ではなく、守る為の武を欲したいと思いませんか？」

「…」

手を差し伸べ言葉を待つ楊衛。

「その武、一度私に預けてみませんか」

その間、呂布は楊衛を見据えながら口を塞いだ。

「……」

縦に頷く呂布。

その手は楊衛の差し出す手を掴んだ。

そして素早く丁原へと振り向き拱手する楊衛。

「奉先殿を武への窮みに」

「それまでの期間をいただきたい」

頭を下げたまま丁原の言葉を待った。

楊衛の白い深衣が靡くと、深く丁原は頷いた。

「相分かった」

「我が名は丁建陽。其方の好きにするといい。」

訓練場を後にした楊衛は結った髪を解きながら茉莉の元へと向かう。すると茉莉が慌てた表情で大声を挙げた。

「いーんですか!？」

「もう少し声を落としなさい」

「だってだって!」

前を向いたまま視線を流し楊衛の口元が緩む。

「策のーつですよ」

## 第十話「琥珀」

明朝、二人の武人が鈍い金属音を立てて両者の武器が火花を散らしていた。

だが一向に旗色が悪いのは身の丈よりも高い戟を手にする呂布。

対するは何の変哲も無い練習用の木剣を携えた楊衛。

容易く呂布の突きを受け流し、右の手の甲へ一撃。

鈍く軋んだ音が小さく鳴った。

苦い表情を浮かべた呂布は直ぐに後ろへ退き、今一度構えを直す。

「戟の重心が寄っていますよ」

楊衛の剣が後方に下がる呂布を捉え、そのまま一気に間合いを詰める。

呂布の左手へと楊衛の薙ぎ払いが迫る。

「支える手も疎かにしない」

小さく呟いた時には既に片方の手へと一太刀が浴びていた。

両の手に包帯を巻いているとは言え、その下から滲む赤い血が楊衛の武を物語っていた。

「……っ……っ……っ！」

戟を持ち直し、後ろに退いた楊衛との間合いを取る。別段何の構えも取ってはいない楊衛は微動だにせず、視線だけを呂布に向けていた。

そして、両者が固まったまま半刻程が過ぎていた。

呂布の右手から血が地面に落ちるのと同時に楊衛へと迫る。これ以上ない速度と力。そして間合い。その袈裟切りは楊衛の頭上へと繰り出される。

だが、一度目を見開いた楊衛は呂布の懐へ一歩進むと、振り下ろされた戟を容易く横へ避ける。驚いた表情を浮かべる暇もないまま、胴への一撃。

木剣とは言え楊衛が繰り出す一撃は重く、それを受けた呂布はそのまま仰向けに倒れた。上を見上げたまま呂布が咳く。

「……えーしゅー、強い」

「恋も、今の一撃は中々なものでしたよ」

鍛錬前に、真名を交わした二人。

楊衛が右手を差し伸べ、呂布は身体を起こす。

すると、怪訝そうな表情で楊衛に視線を向けた。

「……………えーしゅーは」

「…はい？」

「……………えーしゅーは本当に旅人……………？」

首を傾げ、楊衛の顔を覗き込む呂布。

楊衛は軽い笑みを零し口元を袖で隠した。

そのまま視線を呂布へと向ける。

「勿論です」

「貴女より少し大陸を見てきただけの者です」

視線を逸らさずに力強く発した楊衛の言葉に呂布は口を噤んだ。

「……………ん」

軽く頭を頷いたものの、顔は覗き込んだまま。

何も告げずにまじまじと見つめる呂布に、軽く赤面し楊衛は顔を背けた。

一つ落ち着かせるようにと溜息を付くも、不思議に首を傾げ視線を逸らさない呂布。

「…さ、さあ」

「もう一度です」

「……………ん」

言葉を遮るように楊衛は自らの木剣を手に取り、早々と構えを取った。

呂布も同じく、戟を取り次こそはと楊衛を捉えるべく力が入る。

数刻後、両者の稽古が終わり街で朝食を摂っていた楊衛。

呂布は自分が飼っている動物の世話の為、そのまま別れた。

今が乱世だと感じさせぬ程、街は活気で溢れ返り民の笑顔で満ちていた。

楊衛はその様子を目を細めながら見渡す。

自分の目的は「弟子の企てを阻止すること」。

姿は見せぬものの、必ずこの乱世に肖り遂行するに違いない。

天の御遣いを一刻も早く見つけ出すことは不可欠だった。

仲間にならずとも、「弟子側」に付かせなければ良い。それは何としてでも止めなくては。

その楊衛の元へと真剣な表情を浮かべた丁原が歩み寄る。

「そんな気難しい表情では美味しい飯も不味くなるぞ」

丁原が食卓の前に立ち、軽い笑みを浮かべた。

楊衛は拱手しようとする。と丁原は手を前に出した。

「少し話がしたい」

「共に来てもらえないか」

街の市は依然として活気に溢れていた。

飛び交う商人の声。大通りを走り抜ける子供達。

二人とも頬を緩ませながらその光景に目を向けていると、不意に丁原が口を開く。

「楊衛よ」

「其方は天下を治めようと考えておらんのか？」

その言葉の後、楊衛は遠くに目を向けた。

慌しい市の喧騒の中でも鮮明に楊衛は呟く。

「私にそのような力などございません」

「信義、恩恵も全て微々たるものです」

「それに」

楊衛の視線が丁原へと向く。

その眼差しは鋭く、秘めた決意を読み取れる程だった。

「私には成すべき事があるのです」

丁原の髪が風に靡く。

前髪を掻き上げ一つ軽い溜息を付き、言葉が続けた。

「……そうか」

城門の前へと着いた途端、城を背に振り返り腕を組んだ丁原。

「この街をどう見る、楊衛」

楊衛と並び、眼前に広がる街並を捉えながら一歩足を進める。  
同じくして一歩前に進む楊衛。

「民が笑い、喜び、商が出来ている」

「仁義有る統制をなさっているのでしょうか」

先程の鋭さは無く、目元を緩ませ深く頷いた。

「我は民を愛している」

「民が在ってこそその仁であり、民は国の宝だ」

丁原は力強く、そして街を見渡しながら言葉を続ける。

「弱き者が虐げられ、暴虐な者が賞賛される天下など我は欲してはおらぬ」

右の掌を堅く握り締めた丁原。

その瞳は閉じられ、新たな誓いを自分に下すようにも見えた。

「楊衛」

そのままの姿勢で楊衛を呼び掛ける。

同じく微動だにしない楊衛は次の言葉を待った。

「其方は守る為の武を揮い、民を救う知を携え、その仁義も有しておる」

「我に仕えよと無理強いは言わん。只、天下を治めるに価する者だと我は思ふのだ」

暫しの時が過ぎ、ようやく楊衛の口が開いた。

「丁原殿」

「今は未だその時では無いのです」

視線は街並へと捉えたまま、強く呟いた。  
恰も自らへと言い聞かせるよう鮮明に。

「ですが」

「私も丁原殿と同じく、民を愛していますよ」

小さな笑みを浮かべ、丁原へと見据える。  
その瞳は優しく、加えて強い意志を映していた。

「暴君など在于てはならない」

「太平の世は私も望んでおります」

今一度視線を戻し、街並を見渡した後楊衛に背を向ける。

「それを聞いたかった」

「……ならば何も言つまい」

楊衛が丁原を見送り、空を見上げ小さく呟く。

「覚悟は」

「……していたつもりなのですが」

一点の曇りも留めぬ空だった。

市の食堂は普段通りの賑わいだった。  
仕事で疲れた身体を仲間と共に癒す者。  
戦も無く平和だった分かち合う者。  
誰もが満面の笑みで酒を飲み交わしていた。

そこに一つ真摯に二人語り合う卓があった。

「天の御使い？」

男は酒杯を乱暴に置くと相手に投げかけた。

「ああ。どうやらあの楊子遷という者らしい」

「楊子遷？あの呂將軍を破ったという？」

今や民の中でも楊衛は既に風評の的となっていた。  
誰も敵う筈が無い呂布に模擬戦とは言え勝利した、と。

「それだけじゃない。司馬徽の私塾で学を教えていたそうじゃないか」

「知に富み、武にも長けていると…」

「行商人からの話によれば、并州に行き着くまでは山賊に襲われた

村を助けていたそうだ」

「…楊子遷が天の御使いと？」

「そうだ」

「丁原様の信望も厚い。その徳も揃えている御仁だ」

「この戦乱が終わる日も近いのかもしれんぞ」

「そうかもしれないな…。」

酒杯を一気に飲み、乱暴に置くとこの街では見慣れない姿を目にした。

藍色の帽子を被った者がその二人の前に立つ。

「…その話、真でしょうか？」

「ご主人様ー!!!」

茉莉が勢いよく楊衛の部屋の戸を開けた。

その拍子に近くの書物が崩れ、頭を支える楊衛。

壊したらどうするつもりなのですか、と悩ませながらも呟くが、当人は笑って「えへへ」と誤魔化する。

崩れた書物を丁寧に並べる楊衛の袖を引っ張りながらも茉莉は胸元の衿の中から書状を手渡す。

「また伝達が来ましたよ」

やれやれと肩を落としながら受け取り、中身を見た楊衛は表情を変えた。

それに気付いた茉莉は首を傾げながら楊衛の顔を至近距離で覗き込む。

「何て書いてあるんですか？」

いつも通りに茉莉の肩を掴み、元の場所へと戻す。

受け取った書状を懐に仕舞った楊衛。

「どうやら、早々と此処を発たねばならないようですね」

聞くや否や急に肩を上げて喜ぶ茉莉。

それもその筈。并州に到着してからの滞在期間はおよそ一ヶ月。その間、楊衛は恋との稽古、新兵の訓練、治安の政策と忙しい日々を送っていた。

一方茉莉と言つと、稽古にも付き合わせて貰えず、勿論兵の訓練など出来る訳も無く、街の市場で食べ歩いたり、行商人と談話をしたり、子供達と遊んだりと楊衛との時間は無いに等しかった。

そんな日々が続き、嫌な顔を表には出さずとも羨む気持ちは隠せなかった。

「で！で！？誰からですか？」

茉莉は目を輝かせながら楊衛の衿を掴む。

「…………張世平という商人からです」

最早面倒と感じたのか、肩を掴む事すらもしなくなった楊衛の目は、恋との稽古、兵の訓練よりも一層疲れを帯びていた。

それから間もなく、出立の意を伝え次は冀州の張世平へ会いに行く  
と併せて告げる。

謁見の間に通された楊衛の前には、刺史丁建陽のみが鎮座していた。  
周りには武官、文官共に居らず、楊衛が顔を上げると互い違いに丁  
原が頭を下げていた。

「其方には世話になった」

僅か一ヶ月とは言えども楊衛の影響は大きく、新兵の士気や軍師の  
体制、

更には城下の民への振興など、数え切れない程の功績を挙げた。

それを高慢に振舞うことなく、唯々献身的に尽くした楊衛。

頭を上げた丁原は言葉を続けた。

「兵の訓練から治安の政策まで、驚かされる事ばかりだな」

「最早天の御使いなどと言つまい。我は楊子遷という者に惚れ込ん  
だ」

軽い笑みを浮かべたかと思うと、直ぐに楊衛の顔を見据える。

「その知勇、仁徳。今の漢王朝には無き物だ」

「成すべき事がある、とそう申したな」

その視線を逸らさず、ゆっくり頷く楊衛。

そうか、と口を零すと今一度楊衛を捉えた。

「奉先を連れて行ってもらえんか」

互いの表情も変わらずに、楊衛は次の言葉を待った。

「彼奴の武は其方も気付いておるように、錚々たるものを有して  
おる」

「だが、愚直なまでに素直故に悪しき刺史共に利用されかねん」

丁原は楊衛が今まで見た事のない鋭い表情を浮かべる。

「奉先の武を凌ぐのは楊衛、其方しかおらぬ」

「武人として賢人として彼奴を導いてはくれまいか」

口元を袖で隠し、目を閉じる楊衛。  
その様子を凝視する丁原。

不意に楊衛は後方へと振り向き、ある視線へと目を向けた。

「だそうですが、如何ですか」  
「恋」

徐々に影から赤髪の武人がひょっこりと現れた。  
いきなりの登場に一度動揺した丁原だったが、恋は一度頷く。  
それを見て、口元を緩めた楊衛。

「……………恋、えーしゅーについてく」

ふふ、と微笑する丁原。

「子遷、其方は我が盟友だ」

玉座を立ち、丁原は楊衛の前に手を差し伸べた。  
唐突ではあったが、楊衛もその手を取った。  
互いに目を細め、力強く握った。

「力になれる事ならば直ぐに申せ。その証に我が真名【琥珀】を授

ける」

握っていた楊衛は、すぐにその手を離し拱手する。

「永脩と申します」

軽い会釈をする前に、楊衛の肩に手を置く琥珀。

「固くせずとも良い、友として我は力になりたいのだ」

「奉先を頼む」

「好い加減機嫌を直してもらえませんか」

礼だ、と丁原から言われ貴重な馬を貰い冀州へ向かう三人。緩やかに進めるも、三人の間には苦しい空気が流れていた。

明らかに不満な表情を浮かべ、ずっと渋い顔をしている茉莉。それを宥めようと、頭を悩ませている楊衛。

そして、その二人を交互に見つめながら首を傾げる恋。

「だって！」

「何で居るんですか!？」

茉莉は恋の顔を勢いよく指差し、張り上げた声で楊衛を睨んだ。その楊衛は溜息を大袈裟に吐き、がっくりと肩を落とす。

「だから何度も言ったでしょう、頼まれた、と」

「……………?」

恋は別段変わりなく、無口に楊衛を見つめていた。

それに気付いた楊衛も頭を手で支えたまま、恋の方へと振り返る。

「…まあ、気にしなくても構いません」

「まずは張世平に会いましょう」

頭の痛みを抑えながらも、楊衛は馬を一気に走らせた。  
それに逸早く恋が続く。  
今も不満を零す後ろの茉莉も続いた。

楊衛の描く大計は今、動き始めた。

## 第十話「琥珀」(後書き)

長い間更新せずに申し訳ありませんでした、

必ず完結はします。途中で投げ出したりはしません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1037t/>

---

恋姫†無双 師弟伝

2011年10月19日03時00分発行